



発行 真宗大谷派 高山教務所
発行者 出雲路 善公
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
*毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社

念じられ 照らされて

白骨に礼拝する

木名瀬 勝



〔略歴〕1966年、茨城県生まれ。真宗大谷派浄安寺衆徒。核燃料施設や病院の総務職を経て、真宗大谷派職員に。前・真宗本願同朋会館補導主任。現在は退職し水戸市在住。

死は身近にありながら日常生活から隠されている。生の敗北と見なされているので語りあうことが難しい。そんな日本社会において、死について真摯に問いかける人と私は出会ったことがある。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

のであった。その時、私に『白骨の御文』の断片がよぎった。「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに」で始まる蓮如上人のお手紙である。初めて私は自分自身の人生を重ねながらこの御文を拝読した。

その老人は、アジア太平洋戦争で生き残った自分を責め、戦地に残してきた戦友のお骨をいつか迎えに行こうと願いながら生きてきたと語っていた。

そこで思い起こされる法事がある。ある女性から亡き級友の「供養」を依頼された。中学時代の同窓会に参加して級友の死を知ったのだと言う。

自身の拠りどころのない生き方をよくよく思い巡らすと、青春期は「死ななければならぬのになぜ生きるのか」という問いに取りつかれ、生きる意味を見出さずには私の人生は始まらないという空虚感にさいなまれていた。大学に入学した頃は、のちにバブル経済といわれる好景気で、世間は活気に満ちていた。しかし、生きる意味を求めて本物の虫と化し、四畳半の下宿にこもっていた私は、

「死」という漢字は、元々白骨にひざまずく人の姿を表しているそうだが、そのことから私はこう考へる。ひざまずくとは畏敬なる存在に直面している姿勢であるから、「礼拝」とも言える。猿から人間にいつ進化したかはいまだ謎であるが、白骨に礼拝するところに、最初の

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

「ただ白骨のみぞのこれあり。あわれというも中々おろかなり」。あわれとはうめき声である。白骨によって呼び起される感情は、とても言葉では言い尽くすことができない。しかし、言葉にできないのは、それが心の奥深い部分、わが身そのものに触れて、わが身のいのちの罪業性を揺さぶり続けてやまないからであろう。そのことを、自己を責め白骨に礼拝する老人と女性の姿に教えられた。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

人間が誕生したのではない。それは同時に「死」の発見であっただろう。だから、人間の永遠の問いが、この一文字には刻まれているのだと。

には、暗黒の海のように得体が知れない世界に感じられた。あらゆる人間関係や目的の意味を要求し、ことごとく失敗し傷つき、いつしかかたくなな冷たい鉄の心に閉じこもり、闇の海を独りぼつちで漂っていた。「いつかそのうち」と、意味を求めて「いま」を生きていることができないのである。そんな青春はいつ終わつたかといえ、一生すぎやすし」に気づき、まだ人生が始まらないのに、もう半生が過ぎてしまつたという焦燥感に襲われた時であった。そういう取り返しのつかない後悔の念を幾度も味わっている。まさに「なげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず」である。

「ただ白骨のみぞのこれあり。あわれというも中々おろかなり」。あわれとはうめき声である。白骨によって呼び起される感情は、とても言葉では言い尽くすことができない。しかし、言葉にできないのは、それが心の奥深い部分、わが身そのものに触れて、わが身のいのちの罪業性を揺さぶり続けてやまないからであろう。そのことを、自己を責め白骨に礼拝する老人と女性の姿に教えられた。

人間の歴史とは、死んでいったものたちに支えられていく罪の歴史と言えまいか。その歴史の流れを海に譬えらるなら、罪悪の暗黒海とでも言うであろう。そこから光を求めて生まれ、光を求め続けながら漂いさまよっている存在が私である。そんな孤独な闇の子の私に、死んでいったものたちに、白骨となつて呼びかけているのだ。「一切の有情は世々生々の父母兄弟なり」「歎異抄」の世界に帰れ、と。暗黒の海ではなく、浮かばせる海であった。

礼拝とは、はかなき人生に生きる意味を求める心が破れて、わが身の罪業に出会うということなのだ。

あの事故から変わってしまった福島の人たちの現実。その悩み苦しみがまだ続いていることを、私たちは知らないでいる。このままでいいのだろうか。「私たちに忘れないで！」という声なき声に耳を傾けなければならない。私たちの課題は、同じ時を生きる朋を思い、共に生きていくことなのではないだろうか。 桂林教会 日野光洋

「飛騨御坊ボランティア委員会」では原発事故が起こってから「福島に飛騨の野菜を届けよう！」プロジェクトを続けております。子どもを育てる親御さんから、「子どもに安心して食べ物を与えたい」という願いを聞いて始まりました。現在福島では、この活動が風評被害につながるなど様々な意見も出ていますが、この取り組みを続けてほしいという声もあります。放射能の影響にそれぞれ悩んでいるのでしょうか。私たちは「忘れない、共に生きる」との思いの中で、縁ある方の願いがある限り続けていこうと思います。福島で生活を続ける朋は今もそれぞれが悩み、苦しみを続けています。私たちは私たちにできることをしていきたいです。

このプロジェクトへのお問い合わせは高山別院までお願いします。 TEL0577-32-0688

飛騨御坊ボランティア委員会

飛騨御坊御遠忌テーマ リレー随筆 ②

のままでいいのが、今の世・この私

雑行も棄てて 本願に帰す

高山教区高山別院 御遠忌テーマ

「原発事故で苦しむ朋を思う」

先日、東京電力福島第一原発事故による被害者訴訟に対して国と東電に賠償が命じられた。この判決は、全国で約30件ある同種の集団訴訟で2件目である（1件は東電にのみ賠償責任を命じた判決が出ている）。原発事故の被害者の方々は今なお、被害救済と生活再建の為に、それぞれが悩み苦しみながら行動し続けておられる。原発事故の現場から離れて暮らす私たちは、福島の人たちの今の暮らし、心もようを知らないでいる。

私は福島から避難して生活されている、幼いお子さんを抱えたある母親の苦しみを聞かせていただいた。

「原発事故が起きて約2年は、国からの大丈夫という情報を信じ福島にいたが、目に見えない放射能の恐ろしさを学べば学ぶほど子どもに対する心配が大きくなり、父親を福島に残して避難する覚悟を決めた。福島を離れたことで問題が解決したかというところではない。故郷の仲間からは故郷を捨てた、見放したと白い目でみられ、避難したところでは大変よくしてもらえるが、かわいそうな人たちとして常に手を差し伸べられることに苦しさを感ずってしまう。自分の決断が正しかったのかどうか悩み続けている。もし将来子どもに何かしら影響が出てしまったら、事故後すぐに福島を離れなかったことを後悔し続けるだろう。今はただ子どもに何も無いことを願うしかない。」

えまいか。その歴史の流れを海に譬えらるなら、罪悪の暗黒海とでも言うであろう。そこから光を求めて生まれ、光を求め続けながら漂いさまよっている存在が私である。そんな孤独な闇の子の私に、死んでいったものたちに、白骨となつて呼びかけているのだ。「一切の有情は世々生々の父母兄弟なり」「歎異抄」の世界に帰れ、と。暗黒の海ではなく、浮かばせる海であった。

あの事故から変わってしまった福島の人たちの現実。その悩み苦しみがまだ続いていることを、私たちは知らないでいる。このままでいいのだろうか。「私たちに忘れないで！」という声なき声に耳を傾けなければならない。私たちの課題は、同じ時を生きる朋を思い、共に生きていくことなのではないだろうか。 桂林教会 日野光洋

「飛騨御坊ボランティア委員会」では原発事故が起こってから「福島に飛騨の野菜を届けよう！」プロジェクトを続けております。子どもを育てる親御さんから、「子どもに安心して食べ物を与えたい」という願いを聞いて始まりました。現在福島では、この活動が風評被害につながるなど様々な意見も出ていますが、この取り組みを続けてほしいという声もあります。放射能の影響にそれぞれ悩んでいるのでしょうか。私たちは「忘れない、共に生きる」との思いの中で、縁ある方の願いがある限り続けていこうと思います。福島で生活を続ける朋は今もそれぞれが悩み、苦しみを続けています。私たちは私たちにできることをしていきたいです。

このプロジェクトへのお問い合わせは高山別院までお願いします。 TEL0577-32-0688

飛騨御坊ボランティア委員会

「ひだご坊」は毎月20日に発行されます。

☎テレホン法話(0577)34(2313) ○12月21日〜31日:倉田真奈美氏「別院囁託」 ○1月1日〜10日:出雲路善公所長「高山教務所」 ○1月11日〜20日:夏野了氏「瀧成寺」 宗教トラブル相談窓口(0577)3210763

家族で話そう

新連載

人生の

「こんなこと」「あんなこと」



佐賀枝 夏文 (略歴) 1948年、富山県魚津生まれ。大谷大学大学院修士課程修了(哲学)。福祉実践の後、1986年大谷大学教員。2014年大谷大学名誉教授、高倉幼稚園園長、臨床心理士。

はじめに

サブタイトルを「人生の「こんなこと」「あんなこと」としてしましました。この連載で「人生」を中心に書いてみたいと考えています。「ひだご坊」の読者ご自分の人生、わが子、わが孫、知己、友人を重ねて考えていただけるといいなあと思っています。連載となりますが、そのつど読みきりで読んでいただいているように考えています。また、通読していただければひとつの物語となるようにとも欲張って考えています。

これからの「はじめ」です。どうぞ、よろしくお付き合いをお願いします。

ボクは、生きにくさを抱えた少年でした。日々を悩ましく過ごした少年でした。いつのころからか、「さみしい」「つらい」を抱えていました。少年時代、まるで先が見えない濃い霧のなかをトボトボと歩いているようでした。その後、京都の大谷大学で学ぶことになりました。在学中に真宗学の碩学・金子大栄先生の講義を受講したことがありました。期末レポートに成績と共に「人生に学ぶこと」と添え書きをいただきました。金子先生からいただいた「人生に学ぶこと」

を、胸に生きてきました。その道中で考えたこと、気がついたことを、まわらぬ筆で書いてみました。

「生きる」、それは人生の物語

いつのころからか、気がつけば人生を「物語」として考えはじめていました。どなたの人生にも物語があります。生きていけると実にはさまざまな出来事に出会います。そこには、突然の出来事であっても、物語となつていくことがあります。一人ひとりの物語には筋道としてのストーリーがあり、だれひとりとして同じ物語ではないことも興味深いことです。読者の方々は、その人生の物語の真つ最中をつづり、生きていらつしゃいます。他人事ではない、あなたの人生を紐解いてみてはいかがでしょう。

「悩み」も「つらさ」も、すべては「人生」のなかで出会うことからはじまります。「人生」という言葉には、あなたのすべてを包む意味があるようにおもいます。

お釈迦さまが説かれた仏教と、わたしたちの「人生」には、重なる部分があると考えるといいかもしれません。お釈迦さまが出家され苦行されて「さとり」を開かれ仏陀になられた物語にも、「人生」のなかで、わたしたちが出会わなければならないことが配置されています。だからでしょうか、とても他人事ではなく身近に感じます。そして、このことが、お釈迦さまの出家物語である「四門出遊」として伝えられています。

「四門出遊」の物語から

お釈迦さまは、現在のネパール、ヒマラヤの麓の釈迦族の王子さまとして誕生されました。その小さな国には四方に門がありました。お釈迦さまが29歳の時、門から出ようとされるところから物語がはじまります。最初の門で「老人」と出

会われます。人間が歳を重ねて「老い」ることと考えられますから、誰もがいつか出会うことでもあります。つぎの門では、「病者」に出会われます。「病」、これも誰もが大きなり小なり出会わなければなりません。そして、つぎの門では「死者」と出会われました。「死」を迎える、「死」も人生の大きなこととして出会わなければなりません。そして、四番目の門で清しい出家者に出会われ出家されました。この「四門出遊」の物語を通して、人生と「老病死」の関係が説かれています。わたしたちが「老病死」を通して人生を「生きる」ことを問い、人生に学ぶ出発点をいただいたことにな



ります。このように仏教のみ教えは、決して他人事や縁遠いことではなく、実に「わたしのこと」が説かれており、また親鸞聖人のみ教えも同様にだれでもない「わたしのこと」が説かれています。

人生にタイトルを付けてみましょう

さて、あなたご自身の人生にタイトルを付けてみると、どのようなタイトルになりますか。あなたの人生にタイトルを付けてみると、人生の「あゆみ」が少しはつきりとするかもしれません。また、納得できるかもしれません。

人生のタイトルは、「足あと」にあるかもしれません。先々のことはわからないとして、「ああだった」「こんなことがあった」ということが、あなたの人生のタイトルを決める材料かもしれません。ご家族で人生をふり返ってタイトルを通して語り合ってみてはいかがでしょう。

高山別院お煤払い奉仕のお願い



12月21日(木)午後1時からのつとめの後、仮本堂(庫裡ホール)のお煤払いを行います。一年の汚れを落とし、新年をお迎えます。ぜひともご奉仕をお願いいたします。 ※持参品 マスク・タオル・軍手 など

別院真宗公開講座のご案内

2018年1月19日(金)

テーマ「在日浄土人として生きる」

講師 玉光順正氏(兵庫県・光明寺住職)

会場 高山別院 仮本堂(庫裡ホール) 時間 午後2時から4時 聴講料 600円

除夜の鐘と修正会

— お正月も飛騨御坊にお参りください —

高山別院では年越し前から除夜の鐘つきが始まり、年が明け、午前0時から仮本堂(庫裡ホール)にて修正会が勤められます。修正会は、一年の初めに荘厳を整え、身も心もひきしめ、仏恩報謝の思いをもって新しい年にのぞむ行事です。ぜひ、高山別院にお参りいただき、新年の歩みを始めましょう。



除夜の鐘 12月31日(日) 午後11時45分 ※甘酒を用意しております
修正会 1月1日(月) 午前0時 三島多聞 輪番
1月2日(火) 午後1時 四衢亮 氏
1月3日(水) 午後1時 小原正憲 氏

大谷婦人会

新年定例会

日時 1月11日(木) 午後1時から

会場 高山別院 仮本堂 ※甘酒の接待があります。

ご壇案内

11日(木) 映芳寺「下之町」 14日(日) 稱讚寺「下之町」

高山別院 テレホン法話

(0577)34-2313

約3分間の法話をいつでも通話料のみで聴聞いただけます。毎月1日、11日、21日に法話の内容がわかります。

定例法座・法話(午後1時から) ○12月21日(木) 杉野明真氏「照蓮寺」 ○12月27日(水) 三島多聞輪番 ○12月28日(木) 三木朋哉氏「淨福寺」 ○1月11日(木) 三島多聞輪番 ○1月13日(土) 北條秀樹氏「了泉寺」